

市川巡検

井上 薫

入学して三ヶ月あまり、ようやく大学生活にも慣れてきたところで、この市川巡検は当初6月30日に予定が組まれ、私達1年生の初めての巡検となるはずだった。しかし担当の栗原先生の御病氣、また学会が入るなどして、二回ほど延期になり、最終的に実施されたのは12月8日だった。

私はとにかく寒いのが苦手なので、当日の天気を心配していたが、幸いなことに良く晴れて暖かく、絶好の巡検日和となった。9時30分に東西線行徳駅に集合したのは、必修巡検ではないためか10人程で少なかったが、かえって行動が楽で良かったように思う。

行徳駅から千鳥町埋立地にかけての道路沿いにはマンションやテナントが多く、ベッドタウンらしさが感じられた。不動産もやはり東京よりは安いようだった。海沿いまで来て、遠くに宮内庁新浜鴨場を見てから、かつて塩田があったという塩焼町の方面へ向かった。このあたりに来ると一戸建てが多く、犬を飼っている家も目立った。この地域は旧江戸川の自然堤防上にできた、街道沿いの街村が始まりで、北関東の物資を運ぶ重要なルートだった。経済的には半農半漁であり、農業は島畑のある水田やハス田が中心、漁業においては地先漁業権を持ち、海苔の栽培が盛んで、江戸幕府直轄の塩田があったという。近年は埋め立ての促進、東西線の開通、土地区画整理事業の実施などでこの地域は大きく様変わりした。ここの埋立地は関西系の企業の関東進出の足場となり、市川市側にとっても住民の雇用機会の増大や、財政面の利益などのメリットがあり、成功例として数えられている。しかし住民はやはり都内の職場、学校に流れる人が多く、「市川都民」などと呼ばれている。またマンションで暮らす人々には永住志向がなく、社会的移動の激しい土地である。

次に行徳旧集落を抜けて、旧江戸川沿いに出た。この川は天井川で、江戸川区と市川市の境界になっている。対岸には本州製紙工場が見えたが、ここから出る排水が原因で公害問題がおこり、それは浦安の埋め立て促進の一因ともなったそう。

こうして、迷惑な施設は端の方へ置くというように、行政領域の境界あたりの施設や周辺空間の利用の仕方には、行政の矛盾があらわれるということだ。近くには本行徳排水機場があり、旧江戸川が天井川であるため、揚水所でポンプを使って汲み上げてから排水している。また、石灯籠のようなものがそばにあったのだが、それは常夜燈と呼ばれる市指定重要有形文化財の灯台であった。本行徳村はかつて航路独占権を持ち、行徳船という船が、江戸小網町から行徳新河岸の間、三里八丁(12.6km)の距離を往復したそうである。

かつて、軍備の拠点として都市の構造の外側に寺を集中させることがあり、その代表が上野の谷中や、三田だということだ。この行徳地区も寺院や神社が多く、今回はその中の一つである源心寺へ向かった。入ってみると別にどうということもなかったのだが、先生がこれをごらんさいとおっしゃるので見てみると、なんとそこにはほとんど見えなくなる位に埋まってしまったいくつかの無縁仏があった。この地域の地盤沈下のひどさを端的にあらわすものだという。なんともオカルトめいた雰囲気が漂い、これをタネにして一つや二つ怪談でも作れそうであった。

源心寺から本八幡までバスに乗り、昼食後に京成電鉄で国府台に向かった。国府台は文字通り国府のあった場所で、戦前までは陸軍の練兵場であった。戦後土地が払い下げられ、現在は大学、病院などのある文化の地で、北原白秋の「すずめのお宿」の庵があるそう。真間に住む美女手児奈が大勢の男性の求愛に悩み、真間の入江に身を投げたという伝説にまつわる手児奈堂や真間の井戸、万葉集に関連した真間の継橋など、ささやかな名所も数多くあった。以前は洪水時に遊水池になっていた浅い谷底の水田である谷津田が、現在は宅地化され、小さな河川は氾濫しやすくなっているそう。行徳とは一味違う、おちついたたたずまいの地域だった。そして、なごやかで、内容の充実した良い巡検だったように思う。

(12月8日栗原教官指導)